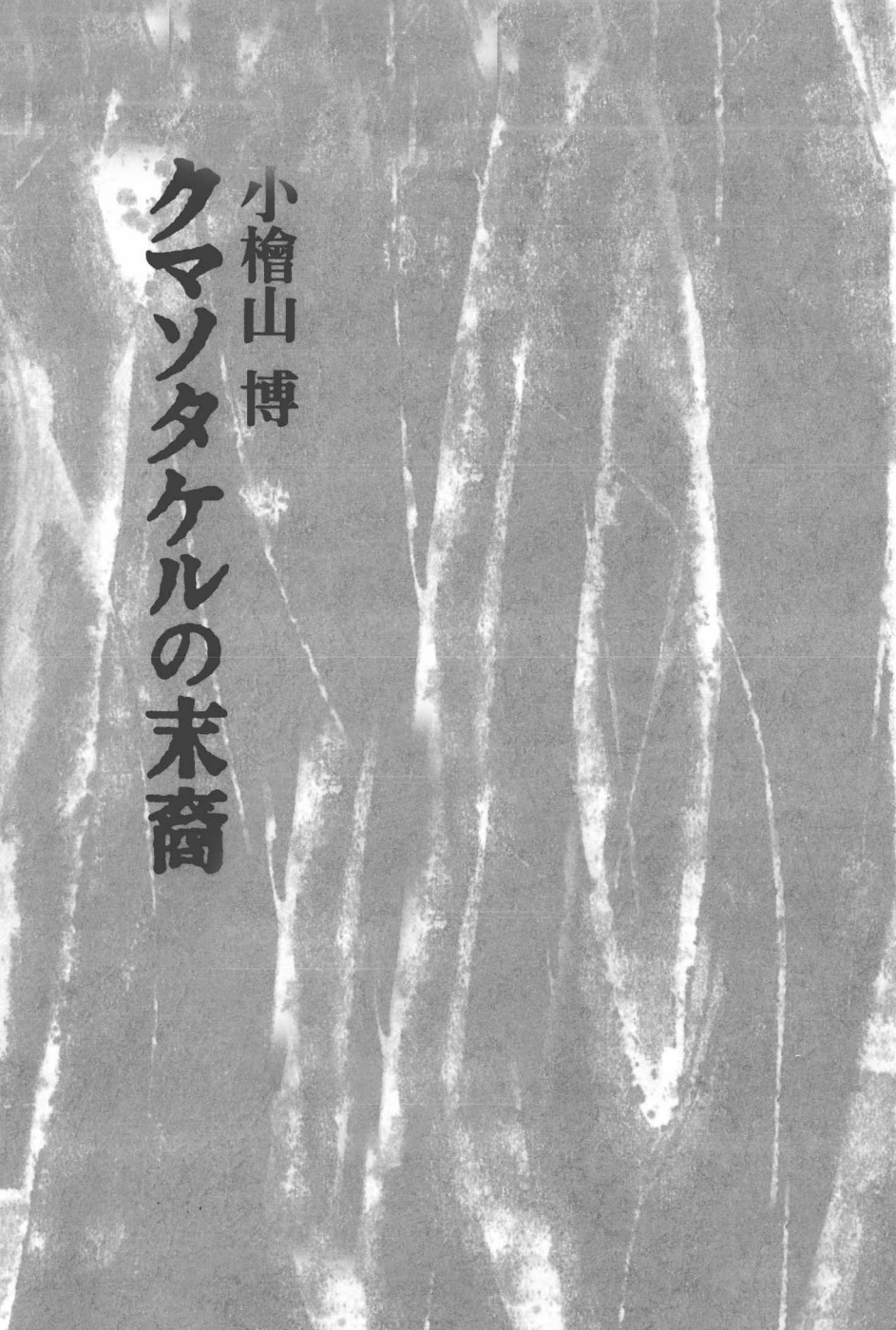


小樽山博

クマソタケルの末裔



新潮社



小檜山 博

クマソタケルの末裔

クマソタケルの^{まつえい}末裔

1989年10月15日 発行

1989年10月30日 2刷

著者 ^{こひやまはく}小檜山 博

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71/振替東京4-808

電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 大口製本株式会社

© Haku Kohiyama 1989, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り

下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-374501-0 C0093

クマソタケルの末裔

眼がさめてから少し眠っていたことに気づいた。草むらの中へ横になり、自分の肘を枕にして寝ていた。月がいくぶん西側へ寄ったように見える。まだ夜中だった。野人じみた格好をした半裸の男は二メートルほど離れたところで仰向けになり、手足を広げて眠っていた。太い鼻が聞こえた。

馬は草を食うのをやめ、首を背中と水平の高さにして立っている。眠っているようだった。虫の声も少なくなっていた。蚊もいなかった。

慎次は上半身を起こして草の中へ坐ると両手を空へ突き立てて伸びをした。疲れて軀が溶けたみたいにだるかった。何も考えなかった。ヒグマに襲われるかもしれないという不安も、気にならなくなっていた。この男がいるから大丈夫だろうと思った。まわりを囲む森の闇を見ると、背筋を涼しさが通った。そのなかに山の靈気みたいなものを感じた。男と出会ってからまだ半日なのに、もう四、五日もたってしまった気がした。肩の凝りが苦しくて首をまわす。何年もつづいてきた重苦しさだ。骨が湿っぽい音をたてて鳴った。

あくびをしてからまた草の上へ横になり、星を見上げた。寝て星空を見るのは生まれて初めての気がした。左手の樹林の上にレモンの汁でもぶちまけたような星雲があった。まぶしかった。眼をつぶると草がおった。臉の裏へ、登ってくるとき見た山の光景が浮かび出てくる。

登りの道がつづいていた。両側に切り立っている山と山のあいだが五十メートルくらいにせばまっていた。山頂のあいだにのぞく狭い空に残っていた明るさが消え、森が黒く見えはじめる。その深みで鳥がキョッキョッキョツと鳴いた。鋭い声が腹に響いた。麓の村を出てから四時間半たっていた。しかしどのくらいの距離をきたものか見当もつかなかった。

馬の歩く蹄の音が、木立ちの幹にぶつかりながら森の奥へ響いてゆく。慎次は裸馬の背にまたがって脚で馬の腹を強くはさみ、手綱につかまっていた。尻がすべり落ちそうになるのをこらえながら、馬の前を歩いてゆく男の背中を見ていた。男は上半身裸だった。腰から下も鹿の皮で作った半ズボンはいただけの格好で、ワラジばきだ。細い坂道の両わきから草がおおいかぶさってきていた。その中を男は、腰から上をほとんど動かさずに登ってゆく。頭の毛は肩が隠れるくらいまで伸びていた。髪は歩くたびに空へ浮いて後ろへなびいた。石器時代の人間の格好だった。

—— こんどはぼくが歩きますから、あなた馬に乗ってくださいよ。

慎次は男の背中に向かって言った。馬は男のものだった。

—— 歩けるんなら歩け。

男は振り返らないで言った。怒っている口調に聞こえた。声の若さや身軽さから、二十四、五歳

に思えた。急坂になり、慎次は馬の背で尻のほうへすべりそうになってタテガミにしがみついた。
——悪くて。

両膝で馬の背をはさみ、尻を前へずらせながら言った。顔や胸に木の小枝がぶつかって痛い。

——わかつているんなら降りれっちゅの。

男がちらつと振り返って見上げてきた。顔の下半分をおおっている伸ばしっぱなしの髭の中に、白い歯が剥き出た。腹を立てている声だった。月の薄明かりでは男の表情は見えなかった。慎次は馬に乗ったままでいた。革靴で急坂の石がら道を歩くのは無理に思えた。それに、歩いてもうすぐ疲れそうだった。

馬の首へ振り分けにして吊り下げである手提げ鞆と南京袋が、背中の中までずってきていた。南京袋は男のものだった。慎次の手提げ鞆には背広の上着やネクタイのほかに、旅行用の洗面道具が入っていた。鼻に山のおいがこもって噎せそうになる。

道が男の腰幅くらいにせまり、両わきからかぶさってきている笹が馬の腹をこすりはじめる。慎次の足でも笹が鳴った。しかし男が胸まであるその笹を掻き分けて行っているのに音はしなかった。

慎次はタテガミにつかまっていたまま、顔だけで後ろを振り返った。暗い森が広がっていた。空へ突き立っている黒い山がこっちへ倒れかかってくる感じに見えた。頭の底へ妻の横顔が浮かび出てきた。慎次の知らない男に向かって笑いかけていたときの、なまめいた表情だった。また胃が

チクチク痛んだ。慎次は臉の裏に出たその顔へ向かい、口を歪めて唾を吐いた。

樹木の葉のあいだを動いてゆく薄い色の月が、枝にぶつかって落ちてきそうに危うく見える。夜になっても気温はあまり下がっていなかった。脚や腕に触れてくる木の葉の冷たさが気持ちよかった。六月の半ばだった。

つかんでゐるタテガミの下の馬の皮膚に、うつすらと汗がにじんでいた。疲労に違いなかった。曲がりくねった登り坂がつづき、片方が崖になつてゐる中腹のところに小川があった。馬が立ちどまつて水を飲みはじめ、男が笹を分けて戻ってきた。腰の右前の革ベルトに下げている三本の小刀の柄が、月の光をはじいて鈍い金色に光った。男も地べたへ四つん這いになって水を飲んだ。

——おい、少し歩く気にならんのか、馬が可哀想だべや。

咎めている口ぶりだった。慎次はあわてて馬から降りながら、まだ遠いんですか、と話をそらせた。川原みたいに石だらけの道だった。

——うるさいな、いちいち。こつから帰れ、おまえ。

男が小川へ口をつけてゐる馬の頭を見おろして言った。馬の喉が鳴つていた。急流に映つてゐる月が金色の粉みたいに散つてゐる。慎次も男の真似をして水を飲んだ。

——このへん、ヒグマでも出そうですね。

慎次は男の怒り声が聞こえなかったというふうには森を見まわした。首を縮めて腕組みをした。流れの音が涼しかった。

——出るさ、ヒグマの巢みてえなもんよ。

男がせせら笑う気配の声で言った。馬が頭を上げて鼻を鳴らした。男が手綱を持って先に立つて歩きはじめた。

——あとのくらいかかるんですか。

慎次は馬の後ろについて歩きながら聞いた。早く着いて横になりました。歩くのがいやだった。聞いてから慌てたが男は怒らず、ほっとした。背後の闇が気味悪く、首筋が寒かった。振り返りそうになるのをこらえつづけた。早く早く、と焦る。行き先はわからなかったが、一秒でも早くマチ場から遠ざかりたい気持ちなのだ。

——明け方になるさ。さっきの村から六十キロちょっとあるんだからよ。

腰と肩で草や木の枝を分けて進んでゆく男が、右前方の黒い山腹を見上げて言った。耳を澄ませるしぐさをした。ヒグマを警戒している様子だった。慎次は、あしたの朝、と声を出しそうになつて口を嚙み唾を飲んだ。もうしかたがない気がした。左側に立っている山の上の暗がりでフクロウが鳴いた。笹や木の葉のこすれる音に、馬の蹄が石を掻く音が重なる。木がおった。闇の中を歩きつづけているうちに、一瞬、別の世界へ行くためのトンネルをぐり抜けているような気がした。

登り坂が終わって山頂へ出た。しばらく平坦な草むらを進んだ。道の両側が高い木立ちの林で、月は見えなかった。馬が歩きながら首をわきへ伸ばして草を食う。

——もちよつと待てよな。

男が手綱を引っぱって馬に言った。慎次は疲れて足が震えた。しかし黙っていた。一度、山を

下って沢へ降り、また山を登りはじめた。汗が噴き出したり乾いたりした。間もなく狭い草っ原へ出た。男はそこで馬をとめると手綱を長く伸ばして木の幹へつないだ。

——ここで休むっからよ、少し眠るべ。

馬の首に掛けていた南京袋を降ろして言った。慎次も手提げ鞆をとった。めまいがし、足がよろけた。返事をしたつもりだったが声にならなかった。ヒグマは大丈夫かどうかを聞いたかったが、言い出せなかった。耳鳴りがし、馬が草を食う音が遠くに聞こえた。

薄い月明かりだったが、まわりを囲んでいる森の中は黒い闇だった。男が草を踏み倒した上へあぐらをかいた。南京袋の口をあけ、中を掻きまわして新聞紙の包みを出す。十個ほどの握り飯だった。

——食いたきゃ食っていいぞ。

男が一つとって口へ運びながら視線を黒い山の尾根へやった。慎次も草を倒して坐り、握り飯をとった。乾きはじめて自分の汗がおった。草や土のおいも鼻にこもった。草むらで虫が鳴きはじめる。

——ついてきて足手まといになっちゃって。

慎次は申しわけないというふうに首をひねって言った。黒い森を見ていた。汗で湿った首や手首を蚊が刺してくる。ボタンをはずしてあるワイシャツの胸もとからも入ってきた。

——何をいまさら。そんなこと最初からわかつてることだろ。

男が、とぼけたことを言うなというふうに声を荒げた。もう三つめの握り飯を食べていた。

——ここ、どのへんになるんですかねえ。

慎次は話を変えるために顔を上向け、月を見て言った。知らばくれた口調で喋り、男が怒っていることに気づかないふりをした。いつもやっていることで、慣れたものだった。星が砂金でもばらまいたみたいに光る。

——言ってもわからんべや。この裏側が大雪山で、その山の向こう側が旭川だ。天塩岳はこっちの方向になるな。

薄闇の中で男の頭がまわり、顎をあちこちにしゃくった。慎次が思っていたのとまったく反対の方角だった。馬は頭を下げて口をずっと草むらへ押しつけていた。草を噛むいい音がした。

——おまえよ、何やってんだか知らんけど、よっぽど疲れてるみたいだな。何よ、その無気力なつら。齢なんぼなんだ。

男が眼を馬へやっただけ聞いた。慎次は指についた飯粒を唇でとりながら、三十一、と言った。微風がきて、青草がにおった。

——俺より五つ上だけか、えらく年寄りに見えるなあ、都会で苦勞してるんだべ。

男の喉がクックツと鳴った。笑っているようだった。慎次はどうこたえていいかわからず、首にとまる蚊を手で叩いた。その音が森へ響いた。

——蚊がいますねえ。

慎次は二つめの握り飯をとりながら言った。梅干しの味が飯にしみてうまかった。

——いるさ、山だも。血が汚れててろくなもの食ってないやつが蚊に刺されるんだ。俺にや蚊

なんかとまりもしねえぞ。

握り飯を食べるのをやめた男が、草の上へ横になりながら言った。暗い森の奥で次々と声の違う鳥が鳴きつづけた。男に聞くと、ホホ、コロッホと鳴くのがフクロウで、ピー、ヒヨウ、ヒヨウというふうな声はトラツグミだと言った。日が暮れてからずっと聞こえていたキョッキョウという鳴き声はヨタカなのだった。鳥が鳴くたびに闇が震えた。山が鳴いているみたいだった。慎次は腕や耳にとまる蚊を追ひ、星を見上げた。また妻の顔が浮かんた。もう寝たころかもしれない。急に胃のあたりが重苦しく疼いた。

妻は札幌の経済団体が出している月刊誌の編集をしていた。いつも昼すぎに出かけて夜の十時ころ帰ってきた。彼女が責任者で、ほかに女性二人と若い男のカメラマンが一人いるということだった。対談の収録とか原稿の締め切り間ぎわ、校正などのときの帰宅は十一時とか深夜の二時になった。また女性の地位の向上や権利の拡大の運動にも熱心だった。日曜も出かけた。たまに慎次は酔った勢いで、子供がほしいなと言った。妻は、いまのところまったく産むつもりはないから、ほかの女性を探したほうがいいかも、と笑った。冗談めいた言い方だったが、眼の底には笑いがなかった。慎次はしかたなく苦笑していた。

結婚して二年目あたりから妻は月に三回くらい、朝方の三時ころ帰ってくるようになった。酔っていた。仕事で遅くなったと言った。朝は髪を肩まで下げて出て行ったはずなのが、帰ってきたときはアップにして頭上で輪ゴムでとめていたりした。襟首の髪がかすかに濡れて光っていることもあった。そういうとき妻は慎次にやさしかった。

——寝とけよ、もう馬には乗せんぞ。

草の上へ肘枕で横になった男が背中をこっちへ向けて言った。慎次は眼の裏にある妻の姿を消して握り飯を食べつづけた。札幌の家を出てから一週間くらいもたった気がした。しかしおとついの朝の九時に立たばかりだった。旭川市とその近くの町にある企業へのコンピュータの売り込みだった。十社ほどをまわった。セエルスマンになって九年近かった。しかし旭川周辺での二日間では一台も売れなかった。

大雪山の北側にある小さな町の駅で、札幌へ帰る汽車を待っていた。出張が無駄だったとわめき散らす部長の顔が見えた。まだ汽車がくるまで時間があつた。慎次は駅を出て向かいにある食堂へ入り、コップ酒を飲んだ。そこへ半裸の男が馬から降りて入ってきたのだった。男は店の手に握り飯を頼み、立ったまま焼酎を飲んだ。

男に怒鳴られて眼ざめ、のろのろと起きた。動きなくなかった。月が木の葉の陰に入って足もとが暗かった。腕時計を見ると二時半だった。男が手綱を持って馬の先に立った。慎次は馬の後ろからついて行つた。眠気と疲れでよろけた。眼をつぶると自分が闇そのものになつてしまったような気がした。いい感じだった。鳥も虫も鳴かず静かだった。馬の蹄の音だけが響いた。いきなり頭上の森の奥で岩でもぶつかり合うような音がした。男が牡のヒグマの鳴き声だと言つた。慎次は男のそばへ走り寄って闇を見まわした。足が震えた。

休んだ場所から四つめの山を越えたところで夜が明けはじめ、まわりの森に小鳥の声があふれ

た。澄んだ空気だった。その中に山の精気みたいなものを感じた。慎次は馬の後ろからついて行きながら、ときおり立ちどまつたりしゃがんだりして休んだ。太ももや腰の筋肉が痛んだ。肺や心臓のあたりも苦しくて息が切れ、膝が震えた。汗が髪の毛の先からまでしたたり落ちた。頭が朦朧として眼もかすみ、ときおり意識がなくなるのを感じた。夢の中にもいるみたいだった。

革靴の底がはがれかけていた。男は少し行ったところで馬をとめて待っていてくれた。山あいの沢に降りたところで幅が十メートルほどの川に突き当たった。膝くらいまでの深さで、靴を持って渡った。空に朝陽の気配が広がり、間もなく木の葉の裏が金色に光り出した。

山腹を巻いて麓へ降り、谷へ出た。片方に岩の剥き出た崖が突き立っていて、もう一方が川になっていた。川幅が狭いわりに水量が多かった。先ほど渡った川の上流らしかった。

崖と川のあいだにある狭い草むらを進む。ゆるい登りだった。馬の脚が笹の葉や草を掻き分ける音に、急流の音が重なった。夜が明けきって山頂が陽の光で輝いた。頭上の林から降ってくる小鳥の声に蟬の音が混じりはじめる。草に載っている露が光った。空に雲がなく、暑くなりそうだった。男が一度、馬に水を飲ませた。慎次は大急ぎで草むらへ仰向けに寝て休んだ。男もしかたないというふうに川べりへ腰をおろした。

またしばらく歩くと崖と崖のあいだがさらにせばまった。スリバチ形になった谷底は川と細い道だけになった。川は岩が深く切れ込み、ますます急流になっていた。遠くまできたのを感じた。別の天体へきたような気がした。その川沿いに一キロほど登ったあと右へ曲がると、急に眼の前に平地が広がった。慎次は馬の後ろから脇へ出、伸び上がって前方を見た。喉の奥から、あ、と

声が洩れた。口があいたままになった。

四方が高い山に囲まれた楕円形の盆地の中に、小さな集落があった。縦横が四、五百メートルくらいしかなかった。右の山ぎわに丸太を組んで建てた十軒ほどの小屋が見えた。ほかに五、六個の家畜小屋らしいものもあった。ニワトリが時をつくるのが聞こえた。かすかに豚の鳴き声もした。村の中央を川が流れていて、川の右側に草と土の広場があった。その広場のふちに丸太小屋が並んでいるのだった。

太陽が左手正面の山頂に出ていた。小屋の藁ぶき屋根が金色に光った。村のほどに、ほかの小屋より三倍くらい大きい家があり、その煙突から白い煙が立ちのぼっていた。川の左側に五、六枚の水田が見えた。稲の苗が青い筋になっていた。水田と山のあいだは畑だった。

男が慎次を振り返って腕時計へ眼をよこし、それよこせ、と言った。小屋のほうで綿羊の澄んだ声が空へのぼった。慎次が渡した腕時計を、男はいきなり川へ向かって投げた。時計は青空の中でキラキラ光ったあと、川の濃い緑の深みへ落ちた。慎次がとめようとしたが間に合わなかった。

——ここでは時計なんかいらんのだ。

男が村を見まわして言った。そのまま馬を引いて小屋のほうへ歩きはじめた。慎次も黙って馬の後からついて行った。腕時計をとったあと、左の手首が涼しかった。鎖でも解かれたみたいに軽かった。道の右側の畑に植えてある大豆の葉が陽に光った。その向こうの山裾にある屋根と柱だけの小屋の中には、炭焼き用らしい土の窯があった。小屋の裏側で犬の吠える声がした。

水車小屋のわきを通っていちばん手前の小屋へ着く。男が馬の首から南京袋と慎次の鞆を降ろ

した。隣の小屋から走り出てきた若い男が慎次を見つめたまま、かかえている麦藁の束を馬小屋の戸口へ置いた。光る眼をしていた。やはり裸に獣の毛皮で作った半ズボンをはいただけの格好で、裸足だった。髪は肩まで垂れていたが、鼻の下や顎の鬚はきれいに剃っていた。二十歳を少し出たくらいに見えた。彼は慎次といっしょにきた男から馬の手綱をとると、首領、おかえんさい、と言った。おお、と首領と呼ばれた男は低く唸った。

——何ですか、この魂の抜けたみたいな顔した野郎は。

馬を小屋の中へ引いて行く若者が、慎次を睨みつけてきて言った。

——知らん、勝手についてきたのよ。

首領が南京袋の口を持って肩へかつぎながら馬の尻を軽く一つ叩いた。ピタンと鳴った。それから慎次に向かっていっしょにこいというふうに顎をしゃくった。先に立って歩きだした。木を焚く煙のおいがした。畑のふちについている道の左側に並んでいる小屋で、綿羊やニワトリが鳴いた。まわりの山からヤマバトの声が降ってきた。知らない小鳥の声もまじった。太陽はもう山頂から離れて空へ浮いていた。まぶしかった。

道の右側に十メエトルおきくらいに丸太小屋が並んでいた。屋根近くの壁から煙突が出ていて、人の住む建物なのがわかった。入り口は板戸だった。窓は四枚のガラスの入った枠が二つずつついている。それらの小屋の裏手にも物置や倉庫らしい丸太小屋が見えた。手前から二つめ的小屋の窓ガラスの中で、五歳くらいの子供がこっちを見て手を振っている。パンツ一枚の格好だ。髪が長くて男か女かわからない。首領がそっちへ向かって右手を軽く上げた。子供が白い歯を見せ